

第9回
日中禅僧交換交流
報告書

2012年8月26日～9月4日

主催 日中韓国際仏教交流協議会

共催 日中臨黄友好交流協会

大本山永平寺

滞在寺院

河南省洛陽市 白馬寺

期間

平成24年8月26日(日)～9月4日(火) 10日間

滞在日程

8/26(日)	中部国際空港発 9:00 (JL883) 上海浦東空港着 10:45 上海虹橋空港発 15:05 (MU5385) 鄭州空港着 16:50 上海で中国仏教協会・李賀敏国際部次長、関係者らが出迎え 鄭州空港より白馬寺まで専用車で移動
8/27(月)～ 9/3(月)	白馬寺において修行体験
9/4(火)	白馬寺より鄭州空港まで専用車で移動 鄭州空港発 12:55 (MU9326) 上海浦東空港着 14:25 上海浦東空港発 17:20 (JL884) 中部国際空港着 20:50

参加者名

徳源僧堂	浅野 東玄	木下 紹胤
虎溪山僧堂	加藤 宗護	飯田 宗興
永平寺僧堂	壽山 俊道	種子 知紀



日中禅僧交換交流報告

徳源僧堂 浅野東玄

この度は日中禅僧交換交流に参加させていただき、誠に感謝しております。

私たちがお世話になったのは、河南省洛陽市の白馬寺様でございます。白馬寺様には百名以上の禅僧が在錫しているとのことですが、近年の日本の臨済下の叢林では考えられないほどの数ではないでしょうか。日本の僧堂において、50名以上あるいは百名以上の雲水が在錫した例は、60年以上遡らなくては殆ど見られなくなりました。また、禅宗における修行生活そのものも、大きな変遷を遂げたと聞いております。専門道場の成立も近世以降と伺ったことがあります。その変化自体は、進歩や退化といった価値判断に馴染むものではなく、むしろ日本の実状に即した必然的なものだったと思います。私自身も、日本の僧堂生活に多くの恩恵を受けてまいりました。ただ、そうではあっても、日本に禅宗が伝来された頃の禅寺の生活を知るには、書物や想像力に依るしか術がなく、確かにさみしいものもございます。その点について白馬寺様は、宏大な寺域に壮麗な伽藍を完備し、多くの僧侶が生活する様子は、まさに語録中に記載されている禅宗最盛期の寺院の生活を今に伝えるものであり、私もその姿を初めて見ることができました。また逆に、おそらくは中国において変化した部分もありました。印象深かったものを挙げるとすれば、それは念仏です。朝課・晩課または坐禅の前後に、何十回と念仏を唱えるというのは極めて新鮮でした。

印象深かったことは他にもございます。30日・31日の盂蘭盆会、施餓鬼等の行事は長時間にわたり、壇上の和尚様方のご苦勞は勿論ですが、熱心に読経・礼拝されている居士・大姉にも感銘を受けた次第です。それは盂蘭盆会のみならず、毎朝、朝課に出頭されている信者の皆様や、昼間の参拝客の方々におかれましても同じです。在家信者の方々から、中国仏教の活気に満ちた信仰の実体を教えていただくことができました。特に私たちとの記念撮影を求めてくれた小さな男の子のことは、終生忘れるものではありません。

交流期間中の日程について申し上げますと、少林寺拜塔を予定していただいたこともありがたいことでした。老大師との相見や禅堂の拝観など、普通ではできないことをさせていただき、ご配慮に感激いたしております。実を言えば、少林寺様にお参りするのには4年半ぶりの二度目でございます。しかし、その感動は決して色褪せたりしませんでした。子供の頃に少しだけ武道をかじったものとしては、武術の伝統を感じさせる磨り減った石畳に感動しました。

少々些末なことではありますが、私は今回の修行体験において、中国茶の美味しさに目覚めることができました。日本にいる時も美味しいものであることは知っておりましたが、これほどまでに奥深いものだと実感できたのは、高価なお茶であることは勿論ですが、本吉法師や監院禅師の温かいお気持ちも大きいのではないかと存じております。

いずれにしても、このように充実した日々を過ごせるとは、日本出発時には思いもしなかったことでございます。同行の高単様方や、きっかけをくださった日中臨黄友好協会様のご指導に感謝しております。それと共に、白馬寺老大師の絶大なご庇護や各役療禅師のご高配、そして中国仏教協会様の温かいご支援に改めて御礼申し上げる次第でございます。中国仏教界の皆様への日本仏教徒に対する親愛の念を、重く受け止めさせていただき

ました。

以上をもって、私の報告とさせていただきます。

日中禅僧交換交流報告

徳源僧堂 木下紹胤

始めに、今回の禅僧交換交流に参加させていただいたことに、深く感謝いたします。

私は中国を訪れるのは初めてでしたが、今回の修行体験において、沢山の驚きと感動を得ることができました。

まず、今回私たちを受け入れて下さった修行体験の拠点である白馬寺の精進料理の美味しさです。中国語で書かれた「五観文」の軸が中央に配されている食堂は、足長机が整然と並べられており、日本とは違い椅子に座って食事をいただきます。持鉢はなく、あらかじめ箸と二つのお椀が並べられており、飯台看がお粥やご飯や3種類くらいのおかずと、饅頭を給仕してくれます。食事のお経を誦み終えたら、日本と同じように黙々と素早くいただきます。稗や粟のお粥も、辛目に味付けされたおかずも、必ず給仕される饅頭も、全て完全精進でありながらどれも本当に美味しかったです。そして洗鉢など細かい作法はありませんでしたが、熱いお粥を急いで啜る中国の修行僧たちに、私たちと同じものを感じました。

それから朝課や晩課、法要で唱えられる音楽のようなお経にも魅せられました。維那が経首を誦み上げると同時に、独特な抑揚のあるお経が始まり、10種類ほどある鳴らしものがそれに合わせてテンポよく演奏されます。驚くべき点は、いくつもあるお経のそれぞれに違ったメロディーが付いており、鳴らしものもそれぞれに打つところが決まっているということです。白馬寺からいただいた経本には、鳴らしものの打つ箇所などほとんど記されておらず、ましてや音符のような音の高低差がわかるようなものも一切記載してありません。声明梵唄のようなものは修行僧には配布されないと、この訪中の間、身の回りのお世話をしてくれた白馬寺の本吉和尚はおっしゃいました。何百年と変わらぬ生活、変わらぬ修行であるため、お経の節も口授されてきたということです。「では、これらのお経の節や、鳴らしもののタイミングはどのように勉強するのですか」と聞いたところ、「解定後に、こっそり修行歴の近い先輩に教えていただいたり、自分で何度も誦み込んで身体に覚えさせるのです」と言われました。この答えにまたしても共感を覚えました。

それから白馬寺に常住されている居士さん、信者さんの多さにも驚きました。広大な敷地面積を誇る白馬寺には、百人以上の僧侶が在籍していますが、観光地でもあるため僧侶には多くの職務があります。そこで普段から、多くの信者さんが境内の掃除、食事の準備、受付などを手伝われていました。また朝課や晩課、食事、坐禅なども積極的に参加されており、とりわけ信者さんの個人的な法要にも僧侶と同じように出頭し、同じように読経されているのには驚きました。そして日本から来た私たちにも、境内ですれ違えば、笑顔で合掌し「阿弥陀仏（オミトフ）」と言って頭を下げてくださる信者さんたちには胸を打たれました。

そしてとりわけ感銘を受けた出来事は、8月30・31日と2日間にわたって行なわれ

た盂蘭盆会法要です。1日目は、夜の7時から11時迄の4時間もかかる長丁場でした。一日がかりで山門の側に組まれたきらびやかな祭壇には多くのお供え物が並べられ、壇上にはマイクを付けた5人の導師が、その下に私たちも含め大衆の僧侶が並んで座るような形で法要は始められました。月明かりの下、野外で行われる盂蘭盆会は座っているだけでも、じっとりと汗が流れてきました。私たちの後方には、いつものように多くの白馬寺の信者さんが読経参拝されていたのですが、夜の暗がりの中、スポットライトを浴びながら、フラフラになるまで身体を丸め、何度も何度も額を座布団に付け、拝をされている信者さんたちの姿には、とても心打たれました。そして雄大で荘厳な白馬寺の雰囲気の中という



のも勿論ありますが、中でも一番感動したのは、盂蘭盆会のお経そのものです。スピーカーから聞こえる壇上の導師方のお経の掛け合いと、それに呼応する大衆のメロディーの付いた読経と、鈴や太鼓、様々な鳴らしものの演奏とが渾然一体となった法要は、胸が震えるほど感動しました。同時に延々と続けられるお経の中に行くと、身体感覚が麻痺していく気がしました。これほど高揚感の溢れる法要を体験したことはありません。

法要行事そのもののあり方を考えさせられました。

またこの修行期間中、白馬寺の住職や高位禅師の方々、本吉和尚から中国茶でおもてなしを受けました。そこでは、普段の日用規則から少し離れ様々な会話が交わされました。中国における寺院の役割や、仏教徒の修行の厳しさや苦労話など興味深い話題ばかりでした。そして言葉や文化は違えども、同じ仏教徒として、互に通じるものが沢山あるというのも大きな発見でした。

あっという間に10日目、黄砂と霧が立ちこめ、太陽を肉眼で目視できる早朝、私たちは忙しくワゴン車に荷物を積み込み、帰りの空港へと向かいました。過ぎていく屋根と自然を眺めながら、またいつか自分の足で中国に来る機会があれば、洛陽に、そして白馬寺に訪れたいと思いました。

最後になりましたが、このような体験の機会を与えて下さった中国仏教協会、日中臨黄友好交流協会、白馬寺等、多くの関係各位の皆様から心から感謝いたします。そして、今後もこの交流が互いに、盛んになるよう祈念いたしまして、私の日中禅僧交換交流の報告とさせていただきます。

第9回日中禅僧交換交流報告

虎溪山僧堂 加藤宗護

まず初めに、貴重な体験の機会を与えて下さったのみならず、多大なるご支援を賜りました萬仞軒老大師に、謹んでお礼を申し上げます。

平成24年8月26日。私を含む6名の雲水が、中国は河南省の洛陽・白馬寺を目指して中部国際空港を出発した。面識はあるもののお互いの人となりもわからない、ぎこちない集団の出発であった。

上海で李賀敏さんと合流。飛行機が2時間遅れるというアクシデントがあり、白馬寺に到着したのは午後10時にもなろうかという時間であったが、白馬寺の三門前では住職の印楽大和尚をはじめ、中国僧の皆さんにあたたかく出迎えていただいた。

その後は宿舎に荷物を置き、かなり遅めの薬石をとってから解定となった。

8月27日。午前4時30分開静。白馬寺の知客である本吉法師と通訳の柳さんに案内され、大雄殿に向かい朝課。鳴らしものの数が多く、独特のリズムで詠まれるお経に戸惑うばかりで、一緒に諷経することができなかった。

後で楞嚴咒、大悲咒、般若心経、消災咒などを誦むと知り、なんとか一緒に誦もうとしたが、今度は日本語と中国語の読みの違いが立ちはだかるのだった。

朝課が終り粥座。食堂は独立式で、五観堂と名付けられていた。百人以上が入れる広さがあり、正面にはおなじみの五観文が掲げられていた。ここで誦むお経は何となく理解できた。僧堂の質素な粥座とは違い、朝からボリュームのある食事であった。



この日は一日、白馬寺の境内を案内してもらった。白馬寺にはたくさんの人が訪れ、熱心な礼拝を繰り返していた。残念ながら、日本ではあまり見られなくなってしまった光景である。

夜には本吉法師の部屋で茶礼。小さな急須でお茶を淹れ、皆の小さな湯呑……というよりはおちょこに次々と注いで、また茶を淹れる。「功夫茶」というのだが、めまぐるしく動く本吉法師の様子は、なるほど功夫のようであった。

いまだ緊張しているわれわれに、一服の茶と本吉法師や柳さんの心遣いは、しみじみと有難かった。午後11時解定。

8月28日。午前4時30分開静。朝課、粥座が終わると、いよいよ坐禅。白馬寺には禅堂がなく、念仏堂で坐禅をする。

坐禅は南無阿弥陀仏の念仏行道がまずあって、その後に座するという半行半坐の形式であ

った。坐り方も緩やかで、僧堂の坐禅とは全く違うやり方であったが、われわれ雲水はみな日本式で坐っていた。また、念仏は思いのほか難しいと知り、菲才の身を恨むのであった。

齋座を挟み、午後は信者さんの法事があるということで、われわれも出頭した。

その後は薬石を済ませてから晩課。晩課はこれも後から知ったが、阿弥陀経とたくさんの懺悔文を誦んでいた。さらに夜坐があり、午後11時解定。

8月29日。午前4時30分開静。薬石までは前日と同じ日程だが、その後は白馬寺の監院さんに招かれて茶礼。博識な監院さんにお話を伺い、知識面でも修行をさせていただいた。

この時は本吉法師と延武法師、李さんに柳さん、他にも数名の方たちがいて、非常に和気藹々とした茶礼であった。茶礼で和合を図るのは、海を隔てても変わらないようである。

確かに茶礼のたびに、白馬寺の方たちとも、われわれ雲水どうしも、徐々に打ち解けていくようであった。

8月30日。午前4時30分開静。朝課、粥座を済ませ、午前7時すぎに嵩山少林寺へ向かって出発。本来は少林寺で粥座のはずだったのだが、手違いで粥座をとってしまったため、二度目の粥座をいただくことになった。味も盛り付けも洗練されていて、精進とは思えない豪華さであった。

次いで住職であり中国仏教界の重鎮である釈永信大和尚に相見し、普通なら絶対に立ち入れない諸堂を見学させていただいた。清代の壁画にも拳法をする僧が描かれていたり、禅堂の聖僧さんが文殊さんではなく達磨さんだったりするあたり、やはり少林寺だと感慨深かった。

その後は白馬寺に帰山して作務出頭。施餓鬼の準備である。白馬寺の僧侶だけでなく、信者さんたちも一緒になって、楽しそうに準備を進めていたのが印象的であった。

施餓鬼は私の知っているものとはまるで違っていて、一座が4時間近くある壮大なものであった。信者さんたちは熱心に礼拝を繰り返していた。

8月31日。朝課如常。午前8時より盂蘭盆会。施餓鬼と盂蘭盆会が別の儀式として行われるのは、私にとっては驚きであった。その後は放参だったため、少々疲れていた体を休めた。

薬石後に本吉法師の部屋で茶礼。このころになると皆かなり打ち解けた雰囲気、日中の修行の違い、お互いの僧堂のこと、他愛のないおしゃべり、時には冗談も言いあっていた。本吉法師に秘蔵の書をいただく。

9月1日。朝課如常。白馬寺の敷地内にはインド式とタイ式の仏殿があり、午前中はそちらに参拝。タイ人僧侶のマハー・チャンさんが導師を務めるタイ式の晩課に出頭した。日本とも中国とも違った、非常にゆったりとした諷経であった。

午後は参学心得発表会があり、居並ぶ中国側重鎮の方々の前で、これまでの感想を一人ずつ発表した。雲水各々、得るものがあったようである。さらに記念品として、鉢と印楽大和尚の書をいただいた。この書は一人ひとり違うもので、私のいただいた書は「佛」であった。

その後は白馬寺の門前横丁を散策し、お土産などを購入。夜は本吉法師と茶礼。

9月2日。朝課如常。午前中は龍門石窟寺院を見学。およそ400年にわたって造営された壮大な石窟寺院に、古の人々の宗教的情熱を感じた。盗掘や政治的理由での破損があり、それだけが残念であった。

午後は白馬寺で香道、茶道、琴の体験。政治は北京、経済は上海、歴史は洛陽というそうで、長い歴史に育まれた洛陽の文化を感じることができた。

9月3日。朝課省略。いつもより少し遅めに粥座をすませ、午前9時から書道交流。白馬寺の僧侶はみな書が堪能で、優雅に雄大に筆を運んでいた。私はというと、己の境涯の至らなさに、ただただ恥じ入るばかりであった。

午後からは白馬寺近くの牡丹園を見学。牡丹は中国の国花であり、洛陽は牡丹が有名とのこと。牡丹の時期ではなかったが、温室ならぬ冷室で開花を遅らせた牡丹を見ることができた。

その後は洛陽市内を見学。有名な王府井のデパートに行き、お土産などを買う。ずいぶん混んでいると思ったら、空いているほうだと言われたのには驚いた。よく考えたら中国には日本の10倍以上の人口がいるのだから、当然である。

9月4日。朝課省略。最後の粥座をとり、宿舎の掃除もすませる。下山するときにご本尊に礼拝するのが習わしだそうで、それに倣い最後の礼拝をする。

出発するわれわれを、印楽大和尚をはじめとする白馬寺の皆さんと、通訳の柳さんが見送ってくれた。空港までは本吉法師と延武法師が同行してくれた。

いよいよお別れというときには、胸にこみ上げるものがあり、目頭が熱くなった。たった10日を共にしただけで、これほどまでに離れ難く、別れ難くなるとは思いませんでした。それだけ濃密な時間を過ごせたということだろうか。

末筆ではありますが、今回の交流に際して、お世話になった方々にお礼を述べさせていただきます。

われわれを迎え入れ、手厚くお世話してくださった白馬寺の皆さん。そして、10日間を共に過ごした李賀敏さん、本吉法師、通訳の柳さん。われわれが異国の地で大過なく修行を円成できたのは、お三方の援助があったからこそです。

私が皆さんのご恩を忘れることは、生涯ないでしょう。ありがとうございました。

日中禅僧交換交流報告

虎溪山僧堂 飯田宗興

この度は大変貴重な体験をさせていただき誠にありがとうございます。日中臨黄友好交流協会をはじめ、中国仏教協会、修行体験を支援してくださった皆様、またお世話をしていただいた方々へ心より御礼申し上げます。

8月26日より永平寺、徳源僧堂、虎溪僧堂より各2名、計6名が日本青年僧として中国河南省洛陽市にある白馬寺へ出発しました。

飛行機が遅れた影響で白馬寺に到着したのは深夜になりました。しかし、住職や修行僧の皆様温かい歓迎を受けて長旅の疲れも忘れ、これから始まる白馬寺での生活に胸が弾み、自己の境涯を少しでも練り上げることができればな、と期待が湧いてきました。

白馬寺は中国最古の仏教寺院で歴史があるお寺です。観光客も多く活気があり、中国を代表する寺院とされています。観光客の殆どの人たちが仏殿の前に立つと必ず膝をついて拝をし、熱心に参拝されていました。しかし、中国の寺院では煙草を吸いながら寺院内を見学する方も多く、日本では考えられないと思いました。この二点は日本と中国の文化の違いを目の当たりにした一幕でした。

朝課は立ったまま朝5時から1時間半ほど行ないました。私たちの道場では坐を組み読経するため、立ったままの朝課は凄く辛いものがありました。日本では魚鱗に合わせて読経しますが、中国では様々な鳴物を使用し、節をつけて誦みます。それはとても神秘的で引き込まれてしまうような韻律でした。節をつけるお経に戸惑いを感じましたが、日本とは違う部分を受け入れ、一緒に読経することによって辛い気持ちを忘れ、無心で取り組むことができたので、終わった後にはとても清しい気持ちになることができました。

朝課中に信者の法要が行なわれる場合は、普段の朝課より時間が少し延び、2時間ほど行なわれます。行道をするとき、須弥壇の裏に回るのがですが、その際、私たちを含む修行僧に20元ずつの御布施が配られることに深く驚きました。信者の方々も、お寺の中で生活されている方が多数おられ、食事や掃除、朝課などを共に行なわれていました。そのせいか、信者の方々でも私たちが普段、経本を持ってしか誦めないようなお経を、経本なしですらすらと誦まれていました。驚きと少し恥ずかしい気持ちになり、改めて日頃の積み重ねが大切だと気づかされました。晩課も朝課と同様に立ったまま1時間半の読経を行ないました。法要がある場合も朝課と同じ様に立ち振る舞います。

私たちの道場では1日、2時間ほど読経します。これに対して中国では約5時間の読経を行ないます。この内訳は午前と午後に二度ずつ、晩課後に一度の計5回、30分念仏を唱えてから20分間止静の繰り返しでした。

中国での坐禅は日本の様に規則に沿って座るということはありませんでした。大半の方が座った瞬間に眠りについておられ、携帯電話があたり前のように鳴っていた光景には少し残念な気持ちになりました。私は坐禅とは心のばらつきを整え統一し、様々な妄想を打ち消すことだと考えているため、中国では坐禅という文化は滅んでしまったのかという思いになりました。それと同様に中国では坐禅はどのように取り組まれているのかと興味を

持ちました。

日本に帰国してからも白馬寺で体験したことを忘れずに、今まで以上に仏道に励み、日々精進して毎日を過ごすことを念頭に入れ修行をしてゆきたいと思えます。

また、今回の修行体験と一緒に日本から中国へ渡った5名の修行僧からも、とても良い刺激を受けることができました。これからの生活で、この修行体験は自分の糧



になると思います。生かすも殺すも自分次第で無駄にならないように務めます。

最後に、白馬寺の知客さんである本吉法師には、中国での生活を様々な角度からお世話していただき大変ありがたく助けられました。本吉法師が毎晩入れてくださるお茶を飲むことで、心が癒され、お互いの気持ちが通い合ったような気がしました。これが喫茶去というものだ実感しました。通訳の方々にも大変お世話になりました。今回の修行体験で皆様の心が禅であり仏であると深く感じました。

洛陽伽藍体験記

永平寺僧堂 壽山俊道

平成24年、8月26日から9月4日までの10日間にわたり、河南省洛陽市白馬寺にて第9回「日中禅僧交換交流」に参加、修行体験を通して現地仏教界との文化交流を行った。

26日早朝、日本を発った一行は上海を経由し、河南省は鄭州空港から車に揺られること1時間あまり、洛陽の地を踏んだ。すっかり夜の帳がおりた後であったが、送迎車を降りて顔を上げるとそこには、白馬寺の方丈である印楽師を始めとする、中国仏教界の重役方の温かく静かな眼差しがあった。一頻りの挨拶と紹介を受け、招かれるままに歩みを進めて外門を潜ると、視界が開けた。煌久と輝く外灯に照らされた両脇に白馬の石像が侍う広場に、白馬寺の山門がその重厚な正門をひらいて我々を迎えてくれた。

永平10年(A.D.67)、漢の明帝は夢に金神をみて、使者を西域に遣わせてこれを求めさせた。諸伝によると、西域は天竺に派遣された使者たちは、仏像と天竺の寺院建築様式、そして『四十二章経』と2人の僧をもともなってこの年に帰還したという。これをもって中国仏教の起源とみなす。これが、いわゆる「後漢明帝の感夢求法伝説」である。

「白馬寺」の名はこの伝説に由来し、後漢の永平年間に明帝によって建てられた中国で最初の仏教寺院であると伝えられており、求法の使者が得た経像を白馬に背負わせてきたことからその名がついたという。また、この時に請来された『四十二章経』は、古来『仏遺教経』、『滙山警策』と並んで、禅宗の『仏祖三経』として尊ばれてきた。

当本山「永平寺」の名もまたこのことに由来する。日本に「釈迦正伝の仏法」を持ち帰ったとの開山道元禅師の思いから、中国の地に仏法が行われるようになった事始と同様に准えてこの名がつけられたという。

むろん、これらの伝承についての学術的な問題点は数知れないが、それでもこの場所は東アジアの仏教者たちにとって心の故郷であり、それゆえ今日に至っても「釈源」「祖庭」等と呼ばれ篤い信仰がよせられている。

修行体験初日の朝、旅の疲れが残る体とは反対にこれから始まる白馬寺での生活に心踊った。まだ暗いうちから仏殿に向かい、朝課が終わるころに空が白み始めるのは日本での僧堂生活と同じであるが、耳に聞こえてくるその読経の聞きなれない発音や、独特なリズムの鳴らし物は、ここが中国であることをまだ寝ぼけた私の頭にもはっきりと気付かせるのである。

白馬寺の基本的な修行生活は念仏堂を中心とし、三時諷経と5回の念仏、坐禅、もしくは

は作務を行なう。

諷経は基本的には立誦である。まったく中国語を解さない筆者だが、楞嚴呪や大悲呪は音でそれと分かり、日本に伝わる発音ではあるが一緒に口ずさんだりして諷経に参加できていることを実感できた。途中、山門、各諷経の対象が祀られる建築物へと称号念仏しながらの行道がなされる。大仏殿に戻ると、称号を挙しながら左右両序交互に拝願を繰り返す。全ての差定が終わるころには1時間半を優に経過していた。

諷経が終わるとそのまま念仏を唱えつつ「五観堂」という額の掲げられた建物に向い、そこで食事が摂られる。魚鼓と雲版が鳴らされた後、僧侶の手で給仕が行われ、念誦、五観の偈を唱える。この間に正中に安置された禅悦蔵菩薩に供えられた仏飯から生飯がとられ、変食真言、甘露水真言、普供養真言とともに作法が進められる。永平寺のように禅堂で坐禅をしながら作法に従い展鉢するということはないが、全員が食べ終わるまで静かに待ち、食事が終るとまた念仏を繰り返しながら、念仏堂に戻りお拝をする。

白馬寺住職印楽法師の話によると、中国の禅堂では言葉を発さないということが厳密に守られており、必ず五観堂で作法に従い食事をする。この諷経から食事までの流れを「過堂」といい、白馬寺は禅寺ではないがこれに准じているのだそうだ。

夜は偈文等一切なく、また食べることも任意であるという。晩課は食事の後行なわれるため、「過堂」ではない。小麦、トウモロコシ、野菜等の米以外の食材は白馬寺の僧侶が作務によって自給自足しているという。今年は小麦で10万Kg、大豆で2.5万Kg以上の収穫があったという。

坐禅は念仏と共に行なう。念仏堂に随喜が集まると、鳴らし物にあわせて口称念仏し、行道する。やがて各位について禅定に入るが、いわゆる禅宗でいうところの坐禅ではなく、恐らくは観想・観察と呼ばれるものである。したがって坐蒲等の敷物はなく、胡座で座り、威儀・進退もそれぞれであった。また、頭を垂れて取り分け深い禅定に入る者もあった……。

中国では8月31日は旧暦（農歴）の7月15日にあたり、盂蘭盆会が行われる。盂蘭盆会というと、目蓮尊者が餓鬼となった母に代り自恣の日に衆僧を供養して六親眷属七世の父母を救済したと説く『仏説盂蘭盆経』と阿難陀尊者が施餓鬼によって延命、仏道成就をなしたと説く『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼経』に由来するが、日本でも「お盆」等と呼ばれ民間での年中行事としての意識も高い。

日本の盂蘭盆会はこれら二つの異なる典拠の混同が顕著であり『仏説盂蘭盆経』が読まれることは少なく、実際には後者に基づいて編集された経典を読誦する。これは、「施餓鬼」の具体的な儀式作法が、『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼経』を中国に伝えた不空三蔵によって訳出されたことによる。つまり、「餓鬼となった母の救済」をテーマにした経典に由来する盂蘭盆会に「施餓鬼作法」を行なうわけである。

白馬寺においても30日、31日の2日にかけて盛大に厳修されたが、驚かされたのはその規模である。30日は、不空によって訳出されたと伝えられる「軌儀」（儀式作法）『瑜伽集要救阿南陀羅尼焰口軌儀経』、『瑜伽集要焰口施食儀』をもとに定庵基なる人物によって編集された『瑜伽焰口施食要集』というテキストを用い、山門前の広場にて夜七時過ぎから延々4時間にわたる施餓鬼大法要が催された。この経本の序には「康熙三十二年癸酉秋分第三褒灑陀」とあり、西暦1693年秋の布薩時に編集されたことがわかる。光緒3

4年(A.D.1908)に江蘇省常州市の有名な禅刹天甯寺で刻本影印されたものを洛陽白馬寺仏教文化研究会が印行している。したがって清代に成立したものであり比較的新しい。

瑜伽焰口の儀式は唐代に不空によって訳出された「軌儀」の文献群から、宋の遵式、仁岳、南宋の顔丙らによって行法が著されたとされる。禅宗でも元代、臨済宗楊岐派中峰明本の『幻住庵清規』中に『開甘露門』がみられる。それまでは限られた上流社会や叢林内での特殊な儀式であった仏教法会も明代には庶民に流行し、そのような中で、明の僧官制度のもと雲棲株宏によって大成され、現代行われる仏教儀礼の基礎が確立した。

清朝にはいると『大蔵経』の刊行に象徴されるように帝室が仏教を篤く擁護したため、明末期以後僧官制度により衰退していた仏教は活気を取りもどす。中国の民衆受容は「現世利益」と「先祖供養」を中心に広まり、また、近代中国仏教の発展過程で明の雲棲株宏が禅浄一致、清の雍正帝が諸宗一致や禅門・浄土門を説き、念仏を宣揚したため、現代中国仏教は宗派を問わず念仏を基本にしているという。

今回随喜した法要もそのような事情からか、西方阿弥陀仏の浄土信仰が色濃く、日本の施食法要では観られない儀式を行なう場面も多く見受けられた。特に印象的だったのは、山門前の広場の東側に祀られた新亡・施主牌の位牌棚から西方に安置された阿弥陀仏のもとへ信者の方々が大行列をなして、それぞれの手に線香を運び、白馬寺の敷地の西の外れにある広場で山のように準備された紙幣を模した金銀紙の冥銭と一緒に焚き上げるという法要のフィナーレである。法要が終わっても燃え上がる炎に照らされながら西方に向い五



体投地を繰り返し続ける信者の姿が目焼き付いている。

翌日、朝早くから準備された巨大な祭壇を前に、『盂蘭盆供儀規』という冊子を底本に3時間半に及ぶ法要が厳修された。儀式の解説がなされ、浄道場、『仏説盂蘭盆経』の読誦、供養諷経、上供諷経、通疏、回向と法要は進み、引き続き白馬寺の裏で放生会がしめやかに密修された。中国の盂蘭盆会は、白馬寺に関して

いえば、一応、盂蘭盆会と施餓鬼会の違いが意識されており、夏安居の終わり、自恣の日にあたる旧暦7月15日前後に二つの法要が並修されると考えた方がよいようである。

中国の仏教は歴史上その隆盛と衰退が著しい。これは、漢民族の仏教受容と現代中国の国家形成に深く関係しているが、こと仏教文化の復興について概観するならば、浄土教と禅宗による活動が先駆けとなる傾向にある。その背景には、本来とりたてて社会的基盤を必要としない教理体系の柔軟さがある。文化大革命以降の仏教文化・建築物の修復復興の事情も同様で、浄土教と禅宗の民間信仰と近代の中華人民共和国政府の宗教政策、また中国仏教界の積極的な宗教活動、研究によって徐々に各分野で成果がみえてきているという。

白馬寺という東アジア仏教史上極めて重要な場所で、より原典の形に近い盂蘭盆会の法要に参加できたことが今回の交換交流の最も大きな成果であった。また、洛陽滞在中、白馬寺に信仰を寄せる洛陽近郊の茶道・香道・書画の匠方との交流や、中国三大石窟の一つ龍門石窟の見学、中国禅宗の名刹少林寺のご住職と対談させていただくという千載一遇の機会を得ることができた。関係各位の方々にこの場をかりて深く御礼申し上げたい旨を付して筆をおきたい。

日中禅僧交換交流報告

永平寺僧堂 種子知紀

8月25日、一日早く永平寺を出発、翌朝7時集合には永平寺から行っては間に合わないためである。当日、空港での集合場所にはすでに他の4人が来ていた。出国手続きを済ませて中部国際空港を出発。

中国の上海空港に着き、入国手続きを済ませ中国仏教協会国際部の李賀敏氏と合流し、バスで一時間くらい移動し、次の空港へ。

その空港では出発が2時間近く遅れ少し不安になる。鄭州空港には白馬寺から監院さんが迎えに来られていた。夜8時過ぎに白馬寺に到着。監院さんと共にかなり遅めの薬石をいただいた後、白馬寺の敷地外にある宿泊施設に案内され、翌日の集合時間を聞き就寝した。

翌朝4時半に起床。念仏堂と書いてある建物へ向かう道を歩きながら、これから始まる中国での修行に胸を躍らせた。念仏堂に着くと、鐘が鳴らされ出堂し、仏殿に向かう。永平寺と違い朝の坐禅がなく、すぐに朝課が行なわれた。リズム良くあたかも歌うような節で、聞き覚えのあるフレーズでもすぐにわからなくなってしまふ。この日の朝は特別な法要が有り、朝課は2時間もかかった。

朝課中、別の建物への移動があり、その建物には、「南無阿弥陀仏」と唱え続けながら行道にも似た動きで向かう。向かった建物には達磨大師から六祖慧能までの仏像が安置されていた。そこでも諷経が行なわれ、また念仏を唱えながら仏殿に戻った。仏殿でもう一度、諷経を唱え食堂に移動する。朝の食事をし、今度は念仏堂に戻り、諷経を唱え終わった。白馬寺では、ここまでを朝課なのだと言う。この時、驚いたのは信者の方も一緒に朝課に出ていることだった。信者の方と一緒に諷経をし、一緒に食事をした。

われわれはその後、部屋に戻り、こちらでは知客にあたる本吉法師に白馬寺を案内された。各建物の説明や仏像の説明、仏舎利塔も見て回った。日本の仏像と中国の仏像とでは形も違えば意味も違っていた。韋駄天様は、中国ではそのお寺に留錫できるかどうかの意味がある。持っている剣を上にはしていると、宗派を問わずにその寺で修行ができ、下にしていると、その寺の宗派しか修行ができないことになっている。

歓迎会の昼食が振る舞われ、白馬寺住職の印楽法師と共に食事をした。午後から坐禅をした。白馬寺は禅宗寺院ではないため、禅堂がなく坐禅は念仏堂で行なわれる。念仏堂では、その名の通り念仏を唱えての行道をしてから坐禅をした。

日本と違い坐蒲がなく、四方の壁にあるベンチに敷き布団のようなものが敷かれ、その上で坐禅をする。郷に入っては郷に従えの言葉通り白馬寺の方の座り方を真似て座ってみ

た。日本のように坐相がどうか言うことなく、足を組みただ座るのみで、鐘の音と共に終わる。それを2炷行い、薬石の時間になった。

薬石後の晩課は夜の7時からで1時間の諷経を行なう。8時からまた坐禅をして9時に一日が終わった。次の日は、午前に坐禅2炷を加え、幾日が過ぎた。

中国では8月31日が旧暦の8月15日にあたり、30日には施食が行なわれた。午後から準備をして、夜の7時から4時間と、とてつもなく長い法要が行われた。五如来に扮する導師が5人。これが本来の施食なのだと聞いたことがあったのでとても感動したが、終るとかなり疲れてしまった。翌日の午前にも長い法要が有り、その2日間が終わったときには、白馬寺の方にも安堵の色が見てとれた。

白馬寺の方のご好意によって少林寺、龍門石窟にも行かせていただきとても感謝しています。未熟な私ですが、この体験によって少し大きくなれた気がいたします。

このような貴重な体験、機会を与えて頂き、多大なるご尽力を賜りました関係者の方々に厚く御礼申し上げ、私の日中禅僧交流の報告とさせていただきます。

日 程 表

8月26日（日）

李賀敏・国際部次長1名が07：30北京発CA155便にて09：35上海浦東空港着。青年僧がJL883便にて10：45上海浦東に着後、15：05上海虹橋空港にてMU5385便に乗り換え、16：50鄭州空港着。バスにて白馬寺へ

張琳副秘書長、長順・教務部次長2名が13：00北京発MU5695便にて約15：00洛陽空港着

白馬寺泊

8月27日（月）

午前中、歓迎式典後、白馬寺を見学。午後、休憩

張琳副秘書長、長順・教務部次長2名が15：35洛陽発MU5700便にて北京へ

白馬寺泊

8月28日（火）

白馬寺にて修行体験

04：30 起床

05：00 朝課

08：00-09：00、午前中一回目の座禅

09：20-10：20、午前中二回目の座禅

11：00 過堂（昼食）

14：30-15：30、午後一回目の座禅

15：50-16：50、午後二回目の座禅

19：00-20：00、晩課（夜の勤め）

20：00-21：00、座禅

白馬寺泊

8月29日（水）

白馬寺にて修行体験

04：30 起床

05：00 朝課

08：00-09：00、午前中一回目の座禅

09：20-10：20、午前中二回目の座禅

11：00 過堂（昼食）

14：30-15：30、午後一回目の座禅

15：50-16：50、午後二回目の座禅

19：00-20：00、晩課（夜の勤め）

20：00-21：00、座禅

白馬寺泊

8月30日（木）

白馬寺にて修行体験

04：30 起床
05：00 朝課
08：00-09：00、午前中一回目の座禪
09：20-10：20、午前中二回目の座禪
11：00 過堂（昼食）
午後、出坡
19：00-20：00、晚課（夜の勤め）
20：00-21：00、座禪
白馬寺泊
8月31日（金）
白馬寺にて修行体験
04：30 起床
05：00 朝課
08：00-09：00、午前中一回目の座禪
09：20-10：20、午前中二回目の座禪
11：00 過堂（昼食）
午後、出坡
19：00-20：00、晚課（夜の勤め）
20：00-21：00、座禪
白馬寺泊
9月01日（土）
午前中、修行体験の感想を準備；午後、感想発表・交流会
白馬寺泊
9月02日（日）
午前中、龍門石窟を見学；午後、少林寺を見学
白馬寺泊
9月03日（月）
一日中、開封大相国寺を見学
白馬寺泊
9月04日（火）
12：30 鄭州発FM821便にて14：05 上海浦東空港着。
17：02 上海浦東発JL884便に乗り換えご帰国
李賀敏1名が17：55 上海虹橋発CA1522便にて20：15 北京着

（中国仏教協会作成）

日本青年禅僧が洛陽市白馬寺にて修行体験と交流

去る2012年3月27日、日本京都にて開催された「第15回中韓日仏教友好交流会議」予備会議の協議に基づき、日本日中韓国際仏教交流協議会から派遣された6名の青年禅僧が今年8月26日より9月4日まで河南省洛陽市白馬寺にて修行体験と交流を行なった。

関係機関はこの中日交流行事を重要視。中国佛教協会副秘書長の張琳氏らが指導のためにわざわざ北京から白馬寺を訪れ、河南省佛教協会副秘書長の邵軍氏や中国佛教協会国際部次長の李賀敏氏が全コースでその団をお供すると同時に、洛陽白馬寺としても完璧な計画を立てたのみならず、安定かつ精細にこの交流行事を全うした。

青年禅僧6名は、8月28日から31日まで四日間にわたる修行体験期間中、白馬寺の皆様とともに出仕・食事・坐禅・念仏・作務をしたり、施餓鬼行事・盂蘭盆会などに出席したりした。29日午前中、登封少林寺にて中国佛教協会副会長、河南省佛教協会会長の積永信和上が親切に禅僧らと会った。帰国する前に、龍門石窟など名称旧跡の見学や茶道・香道・書画などの交流もした。

9月1日午後、洛陽白馬寺にて「中日佛教交流修行体験報告会」を盛大に挙行了。中国佛教協会副秘書長兼洛陽白馬寺住職の印楽法師、中国佛教協会国際部次長の李賀敏氏、河南省洛陽市宗教事務局の王曉輝局長、河南省佛教協会副会長の心舫法師・趙長欣秘書長・邵軍副秘書長らが出席。印楽法師は総括発言の中で、中日双方がその中日禅僧の交換交流を中日両国佛教の「黄金の絆」関係を強固なものに発展させるために現代社会における具体的な実践と見なしながら、1998年以来この度を含む六回にわたる日本からの禅僧交流団を受け入れると同時に、中国佛教協会からも日本に計4回派遣したことを振り返った。6名の青年禅僧がこの容易にできないチャンスや縁を大事に、これからそれぞれ中日世代友好や「黄金の絆」関係の促進のための友好使者になるよう大いに寄与した。

6名の青年禅僧も白馬寺における修行体験の切なる感想をそれぞれ述べ、中日両国禅宗の修行上の異同を比べ、中国の国民及び仏教徒が日本の国民とその仏教徒への厚誼に感謝し、活力に満ちた中国佛教盛況ぶりを謳い、実りのある成果を成し遂げたとみな言い表した。

白馬寺は中国史上最初の寺院で、後漢永平11年（西暦68年）に創建され、「釈源」や「祖庭」と称される。敷地面積は13000ムー（約867万㎡）、僧侶は現在120余名。

9月4日、日本禅僧一行は洛陽白馬寺での修行交流を円成のうえ、帰国した。

（中国仏教協会国際部 李賀敏記）

発行 日中臨黄友好交流協会事務局

〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町 8 - 1 花園大学内
禅文化研究所内

TEL 075-811-5256 FAX 075-811-1432